地に根を張るように事業を広げ町の景色をつくっていく。

沖縄本島から南西に約300km。大小6つの島で形成された宮古島市は、温暖な気候と豊富な観光資源があり、観光客や移住者も多い。「下地診療所」はこの地で2008年に開院した。島に根を下ろし、地域のニーズと期待に応えるためにと、事業を展開する同診療所の理事長に、思いや信念についてお話を伺った。

医療法人 下地診療所
〒906-0304 沖縄県宮古島市下地字上地634-1

打出（うちで） 啓二（けいじ）氏 下地診療所 理事長

PROFILE

1996年大阪市立大学医学部卒業。大阪大学第2外科入局、大阪大学医学部付属病院にて臨床研修後、市立川西病院、大阪大学医学部付属病院、那智勝浦町立温泉病院 勤務などを経て、2005年宮古島に移住。医療法人中部徳洲会 宮古島徳洲会病院 外科医長、与勝あやはしクリニック院長を歴任後、2008年に「下地診療所」を開院。2017年から現職。医学博士、日本消化器病学会専門医、日本外科学会認定登録医、日本医師会認定産業医・健康スポーツ医、日本禁煙科学会認定禁煙支援医師、労働衛生コンサルタント、JICA国際緊急援助隊医療チーム・救助チーム医療班 登録隊員

島の自然に惹かれ出会いに導かれるように開業した。

宮古空港から南西へ車を走らせること約10分。快晴の空の下に広大なキビ畑が続く。「今日は朝から天気が良くてよかったですね。きっと島に縁があるんでしょうね」。そう笑顔で迎えてくれたのは、下地診療所の理事長を務める打出啓二氏だ。青空とハイビスカスの赤が映える真っ白な外観。2008年の開院から17年目を迎え、当初診療所のみだった敷地内には、通所リハビリセンターと病児保育センターが併設され、徐々にその役割を広げてきた。

「宮古島に来たのは、当時勤務していた大学の教授の同級生が宮古島で病院を経営されていて、そこに派遣されたのがきっかけです」。元々、地域医療に関心があったという打出氏は、募集がかかると自ら手を挙げて半年間、宮古島で医師として勤務した。空き時間に始めた琉球空手を通じて、地元の方々との交友関係が広がった。初めて訪れた宮古島だったが、豊かな自然に惹かれ、地元の方とのご縁に導かれるように、「将来ここで開業したい」と思うようになったとふりかえる。

その後、博士号を取得するために大学に戻った打出氏は、地域医療や僻地医療にも携わる。10年間の医局での人事を離れ、再び宮古島の地へ降り立った。勤務医として働いたのち、空手仲間の紹介で、下地の土地を譲り受け、下地診療所を開院したのは2008年のことだった。

地域のニーズを把握して必要とされることをやる。

診療所の待合室には畳スペースがある。待ち時間に少しでも肩の力を抜いてくつろいでほしい。顔見知り同士、会話に花を咲かせてほしい。そんな診療所の配慮が伺える。やわらかな光がさし込む穏やかな空間には、メッセージのようにも映るこんな言葉が掲げられていた。

『地域のニーズと期待に応え、関わる全ての人々が健康で豊かな生活ができるよう、医療・介護サービスを通して地域社会に貢献する。』

診療所を医療法人化する際にあらためて掲げられた理念だ。ここ下地は宮古島市の中心街から車で20分ほどの場所にある。移動に不自由なお年寄りも多い事情を察し、開院当初から運転手を雇用して、無料の送迎を始めた。農業従事者も多く、リハビリを必要とする患者も多い。そんな状況の中で、優秀な理学療法士との出会いを機に、リハビリ部門を大胆に広げた。診療所内に完備されたリハビリ室に加えて、敷地内に通所リハビリセンターを増設。2017年には機能特化型デイサービス『アルけーる・クラせーる』を開業した。周辺には学校や児童施設があり、子育て世帯も多く暮らす。「仕事世代の方々へお役に立てるように」と、2014年には敷地内に病児保育センターを開業。「職員と地域の方の子育てを共に支えたい」と、企業主導型保育園も併設する。

「せっかくこちらに住まわせてもらっているので、まずは地域の方のお役に少しでも立てることをしたいというのが第一の目標です。我々がやりたいことをやるのではなく、必要とされることをやる。地域のニーズはどこにあるのかをいつも考えながら地域の方と接してきました」と打出氏は話す。地域の環境から必要とされることを汲みながら、現場と向き合う日々だ。

『アルけーる・クラせーる』は今後店舗を増やすことを視野に入れているそう。「介護保険で利用ができる施設で、介護度を軽減することにもつながるので、長い目で見て医療介護費の削減になると考えています」と打出氏は展望を語る。

対面診療にこだわり関係を大事にしたい。

宮古島市の人口は約55,000人。離島といえども、打出氏曰く「適度に田舎で適度に都会」とあって、立地条件に左右されることなく、医療体制も一定の水準を維持できる安定した環境にあるという。「離島医療の環境の中では、割と恵まれている場所ではあるんです。宮古島市は医師会と病院が協力関係にあるので、病診連携の仕組みも充実しています。まずは地域の診療所にかかってもらって、必要があれば病院に紹介する。病状が安定したら、地域の診療所に戻す。そうした体制や仕組みが備わっているというのは、地域医療を維持していくうえで大事なことですし、この地域の医療の可能性も感じます」

自分が診られるものとそうでないものを見極めることも医師の役目。診断に苦慮するような時は躊躇なく大きな病院に紹介をする。消化器外科を専門にした理由のひとつは「幅広く疾患を診たい、という思いがあったから」。その言葉を裏付けるように、下地診療所を訪れる患者は子どもからお年寄りまで年代も症状も幅広い。日本全体で見ると、離島医療の最前線では、テクノロジーを駆使した未来の医療が動き始めている。そんなダイナミックな技術の発展もありながら、ここ下地には、下地の時間が流れていた。

「私はあえて対面診療にこだわっているところがありまして。やっぱり患者さんを診て、触って、診察をして初めてわかることがあるんですね。患者さんも対面でお話しした方が、安心できると思いますし人材には限りがありますが、医師対患者の関係を大事にしたい。そう思っています」

下地診療所のロゴの中央には、旧下地町のマークがあしらわれている。フラッグ型の精悍なデザインが印象的だ。この地域が宮古島市に統合される前の、旧下地町の町章に使われていたマークを元にしたいと、デザイナーに依頼して作ってもらったものだ。

車両などにもあしらわれている下地診療所のマーク

「9年目で医療法人化したのも、誰が継いでも事業を続けられるからです。一代で終わりじゃ困るので。せっかくこの地域につくらせてもらった診療所ですし、100年後も200年後もあればいいなという思いがあります」

急患の子どもを診察する打出氏。子どもからお年寄りまで、幅広い患者が診療所を頼る。

開業当初は、1日の患者数が5～6名ということも少なくなかった。「駐車場がガラガラだと人が入っていないみたいだから、職員の車を前に止めてもらって、とかね。そんな時代もありましたね」と打出氏は懐かしそうに笑う。少しずつ診療所の評判は広まり、今では外来と訪問を合わせた患者数が1日平均100名を超える。遠方からの利用者も増えた。

「『ここにきて今までなかなか治らなかった痛みがとれた』『おかげさまで調子がよくなった』と利用者から声を掛けてもらうと、少しは信頼していただいているのかなという実感が湧きますね」と、控えめに今の診療所を評価した。

目下、医師2名体制の元、外来と訪問、各施設を行き来する慌ただしい毎日。「移動の車中で昼食を摂りながら、美しい海や自然を眺めると目が休まるんです。気分転換になっています」

かつての町章を取り入れた下地診療所のマークを掲げ、この地に根を張るように、少しずつ事業を広げて、下地の景色を作ってきた。宮古島の美しい景色に打出氏が助けられているように、下地診療所が描いてきた島の景色は、これからも地域の人々の健康を助け、支え続けることだろう。